

大学生のピア・サポーターにおける 活動動機に関する調査研究

藤原 美聡¹⁾, 石田 弓²⁾, 兒玉 憲一²⁾

援助のための訓練を受けた学生(peer supporter: PS)が、問題に直面した仲間を支援する活動をピア・サポート活動(peer support activity: PSA)という。研究1では、PSの参加及び継続動機、活動意欲を高める経験を明らかにするため、11大学12団体のPS204名に質問紙調査を実施した。その結果、活動を通じた学びや出会いを期待して参加し、継続するPSが多いことが明らかとなった。また、各団体の主な活動が充実することやPS同士がサポートし合えることがPSの活動意欲を高める可能性が示された。研究2では、PSの維持にともなう苦労や工夫を明らかにするため、7大学の教職員9名と学生代表者1名に半構造化面接を実施した。その結果、運営側は苦労を感じている部分に対して多くの工夫を行う傾向が示された。また、PSの維持のためには活動自体の存続のための取組みも重要であることが示唆された。

キーワード：ピア・サポート活動, 参加動機, 継続動機

University Students' Motivation for Being a Peer Supporter

Misato FUJIHARA¹⁾, Yumi ISHIDA²⁾, Kenichi KODAMA²⁾

Peer support activity (PSA) is the act of helping friends in need by student peer supporters (PSs) trained for providing assistance. In Study 1, a survey was performed on 204 PSs in 12 organizations in 11 universities to investigate their motivation for joining and continuing to be a PS, and their experience that elevates their drive to pursue these types of activities. Results indicated that many PSs joined PSA to meet friends and learn from their experience and are continuing to be a PS for the same reason. Furthermore, fulfilling main activity of the organization and having an environment with mutual support for PSs possibly elevated their drive to pursue these activities. In Study 2, a semi-structured interview of nine faculty members and one student representative in seven universities was conducted to investigate their difficulties and endeavors in maintaining PS. As a result, the organizing body tended to take more measures to improve the aspects that posed more problems. Further, it was suggested that taking measures for maintaining the organization was also critical for continued PS work.

Key words: peer support activity, motivation for participation, motivation for continuing

1) 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

2) 広島大学大学院教育学研究科

1) Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University

2) Graduate School of Education, Hiroshima University

I. 問題と目的

ピア・サポート活動 (peer support activity : PSA) とは、援助のための訓練を受けたボランティアであるピア・サポーター (peer supporter : PS) が、問題に直面した仲間を支援する活動である¹⁾。PSA はカナダで生まれた活動であるが、今日では世界各地に広がり、援助の対象も子ども、学生、地域の人々、障害者、高齢者と幅広い²⁾。日本の大学においても学生支援の方法として注目され、平成22年度には、国立大学の57.1%、私立大学の33.4%、公立大学の28.6%で「ピア・サポート等の学生同士で支援する制度」が実施されている³⁾。ただし、その活動内容や形態は多岐に渡り、PSの役割によって、相談相手になる「相談室型」、学習支援者になる「修学支援型」、新入生のよき先輩になる「新入生支援型」の3つに分類され⁴⁾、その意義や効果も様々である^{5), 6)}。日本学生支援機構の調査によれば、「参加が一部の学生にとどまり、広がらない」という設問に約7割の大学が「そう思う」と答えている³⁾。また、新学期を過ぎると来談者が減少し、PSの活動意欲が低下するという実態が複数の大学で報告されている⁷⁾。

一方、活動を継続しているPS対象の研究もある。村山⁸⁾は、現役のPSに面接調査を行い、参加動機を「希望職種への接近動機」、「臨床心理学分野への興味」、「自己の内面的成長動機」、「援助行動志向動機」、「ボランティア活動への興味」、「外発的動機付け」、「漠然とした期待」の7つに分類した。また、ある大学ではPSに質問紙調査を行い、継続動機として、「人の役に立ちたい」、「自己成長の場」、「人とのつながり」を報告している⁹⁾。

上述したPSの確保の困難さやPSの活動意欲の低下という課題に対して、すでにいくつかの大学で独自の取組みがなされている^{10), 11)}。しかし、複数の大学における取組みを比較検討した研究はいまだみられていない。

そこで本研究では、全国のPSAを実践している大学のPSを対象とした質問紙調査(研究1)及び運営側の教職員等を対象とした面接調査(研究2)を通して、PSの参加及び継続動機の特徴

や運営側の苦勞や工夫の実態を明らかにする。そして、より多くのPSを確保し、PSの活動意欲を向上させるための方策を提言することを目的とする。

II. PS対象の参加及び継続動機調査(研究1)

1. 目的

PSのPSAへの参加動機と継続動機の特徴を明らかにする。また、PSが活動意欲の向上につながるかと考えている経験を明らかにする。

2. 方法

1) 調査対象

全国の大学のPSAのうち協力の得られた11大学の12団体の204名を調査対象とした。有効回答者170名(有効回答率83.3%、男性44名、女性126名)を分析対象とした。平均年齢は20.8歳($SD=1.8$)であった。

2) 調査期間

2011年7月から2011年11月。

3) 調査手続き

各団体の代表者を通して無記名自記式質問紙(返信用封筒添付)を各PSに配布し、個別に郵送法で回収した。また、代表者には所属PSAの基本情報について質問紙への回答を求めた。

4) 質問紙構成

(1) 活動への参加動機を問う項目 参加動機に関する先行研究^{8), 12)}を参考に独自に作成した29項目。5件法での評価を求めた。(2) 活動への継続動機を問う項目 継続動機に関する先行研究^{8), 13)}を参考に独自に作成した29項目。5件法での評価を求めた。(3) 活動における各経験の活動意欲向上への有益度を問う項目 先行研究^{10), 11), 14)}を参考に独自に作成した26項目。5件法での評価を求めた。(4) 属性 性別、年齢、活動月数について尋ねた。

3. 結果と考察

1) 各項目の因子構造の検討

(1) 参加動機 主因子法、プロマックス回転に

表 1. 各群の参加動機因子の得点, 継続動機因子の得点, 各経験の活動意欲向上への有益度得点の平均値と標準偏差

	対面悩み相談群 平均値(標準偏差)	広く学生支援を行う群 平均値(標準偏差)	1年間の新入生支援群 平均値(標準偏差)
【参加動機因子】			
学び・出会いへの期待	3.26(0.13)	3.46(0.94)	3.66(0.84)
居場所としての期待	2.28(0.12)	2.51(1.07)	2.21(0.91)
援助スキル習得欲求	3.70(0.12)	2.96(0.88)	2.56(0.72)
【継続動機因子】			
学び・ふれあい動機	3.36(0.88)	3.38(0.12)	3.63(0.11)
援助スキル習得動機	3.52(0.94)	2.63(0.12)	2.00(0.10)
居心地のよさ	3.21(1.23)	2.72(0.14)	2.88(0.16)
自己向上動機	2.58(0.96)	2.68(0.12)	2.61(0.13)
所属団体の存続期待	3.10(1.02)	3.25(0.12)	3.36(0.12)
【各経験の活動意欲向上への有益度】			
相談活動以外での企画・運営	3.07(0.81)	3.48(0.11)	3.33(0.11)
研修の受講や情報提供的援助	3.49(0.62)	3.28(0.10)	2.72(0.10)
新入生支援や学習支援	3.03(0.68)	3.44(0.10)	3.19(0.11)
相談活動とPS同士のサポート	3.86(0.68)	3.71(0.10)	3.68(0.11)
電話・メール相談	2.68(0.86)	2.48(0.12)	3.42(0.12)

よって探索的因子分析を行った。因子負荷量が0.4以下あるいは複数の因子にまたがって0.4以上であった計4項目を除外し、25項目4因子解を採用した。第1因子は9項目で、PSAを通してさまざまな学びや人との出会いへの期待を表すため、「学び・出会いへの期待」因子と命名した($\alpha=0.89$)。この因子には、村山⁸⁾の「自己の内面的成長動機」や「ボランティア活動への興味」、「漠然とした期待」の概念が含まれると考えられる。第2因子は7項目で、PSAの場が安心できる居心地のよい場所となるのではないかという期待を表すため、「居場所としての期待」因子と命名した($\alpha=0.88$)。第3因子は7項目で、援助のための知識や技術を身に付けたいという欲求を表すため、「援助スキル習得欲求」因子と命名した($\alpha=0.82$)。この因子には、村山⁸⁾の「希望職種への接近動機」や「臨床心理学分野への興味」、「援助行動志向動機」の概念が含まれると考えられる。第4因子は2項目で、友人からの紹介や、PSの中に目標とする先輩がいたというきっかけを表すため、「友人や知人からの紹介」因子と命名した($\alpha=0.47$)。この因子には村山⁸⁾の「外発的動機付け」が含まれると考えられる。なお、第4因子は α 係数が低いため、以降の分析では用いないこととした。(2) 継続動機 主因子法、プロマックス回転によって探索的因子分析を行った。因子負荷量が0.4以下あるいは複数の因子にまたがって0.4以上であった計5

項目を除外し、24項目5因子解を採用した。第1因子は10項目で、活動を通してさまざまな学びや人との関わりが得られていることを表すため、「学び・ふれあい動機」因子と命名した($\alpha=0.92$)。この因子には、先行研究⁹⁾の「自己成長の場」の概念が含まれると考えられる。第2因子は4項目で、心理学への関心を持ち、活動によって援助のための知識や技術を身に付けられていることを表すため、「援助スキル習得動機」因子と命名した($\alpha=0.80$)。この因子には、先行研究⁹⁾の「人の役に立ちたい」という概念も含まれると考えられる。第3因子は3項目で、PSAの場が安心できる居心地のよい場所となっていることを表すため、「居心地のよさ」因子と命名した($\alpha=0.87$)。この因子には、先行研究⁹⁾の「人とのつながり」という概念が含まれると考えられる。第4因子は4項目で、人に必要とされることを実感でき自信が持てることを表すため、「自己向上動機」因子と命名した($\alpha=0.80$)。第5因子は3項目で、所属団体の今後の継続や発展を願い、団体への帰属意識やPSとしての自覚から継続していることを表すため、「所属団体の存続期待」因子と命名した($\alpha=0.72$)。(3) 各経験の活動意欲向上への有益度 主因子法、プロマックス回転によって探索的因子分析を行った。因子負荷量が0.4以下あるいは複数の因子にまたがって0.4以上であった計4項目を除外し、22項目5因子解を採用した。第1因子は7項目で、研修会

や各種イベントの企画や運営を行うことを表すため、「相談活動以外での企画・運営」因子と命名した ($\alpha = .87$)。第2因子は6項目で、研修会への参加や教職員からの指導と、情報提供を行うような活動を表すため、「研修の受講や情報提供的援助」因子と命名した ($\alpha = .82$)。第3因子は3項目で、新入生の各種支援活動や学習支援を表すため、「新入生支援や学習支援」因子と命名した ($\alpha = .71$)。第4因子は4項目で、利用学生への対面での悩み相談とPS同士の相互サポートを表すため、「相談活動とPS同士のサポート」因子と命名した ($\alpha = .78$)。第5因子は2項目で、電子媒体による相談活動を表すため、「電話・メール相談」因子と命名した ($\alpha = .76$)。

2) 所属するPSAの類型化

本研究の調査対象には、早坂⁴⁾のPSの役割による類型には分類されないPSAが含まれていた。そこで、新たに、所属する団体の活動形態によって分析対象者を3類型に分類した。まず、主な活動として対面での悩み相談を行っている4団体を「主に対面の悩み相談を行う団体(以下、対面悩み相談群)」とした。この群には計44名(男性7名、女性37名)が含まれ、平均年齢は21.6歳($SD=2.1$)、平均活動月数は24.6ヶ月($SD=17.1$)であった。この群は、早坂⁴⁾の「相談室型」に対応すると考えられる。次に、学習支援や新入生支援、対面での悩み相談、交流の場の提供など、いくつもの活動を展開しており、広い意味での学生支援を行っている6団体を「修学支援など広く学生支援を行う団体(以下、広く学生支援を行う群)」とした。この群には計68名(男性6名、女性62名)が含まれ、平均年齢は21.1歳($SD=2.1$)、平均活動月数は12.6ヶ月($SD=8.5$)であった。この群は、早坂⁴⁾の「修学支援型」と「新入生支援型」に対応すると考えられる。最後に、2年生が同じ学部の1年生の支援を行っている2団体については、活動期間が原則1年間であるという特徴を考慮し、「原則1年間の活動として新入生支援を行う団体(以下、1年間の新入生支援群)」とした。この群には、計58名(男性31名、女性27名)が含まれた。平均年齢は20.0歳($SD=0.6$)、平均活動月数

は9.9ヶ月($SD=4.5$)であった。なお、各群の参加動機因子、継続動機因子、各経験の活動意欲向上への有益度の得点の平均値と標準偏差を表1に示した。

3) PSAの類型ごとの動機等の検討

(1) 対面悩み相談群 この群の参加動機因子の得点について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で($F(2, 86)=63.29, p<.01$)、Bonferroniの方法による多重比較(以下、多重比較)の結果、「援助スキル習得欲求」、「学び・出会いへの期待」、「居場所としての期待」の順に得点が高かった。また、継続動機因子の得点について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で($F(4, 172)=13.02, p<.01$)、多重比較の結果、「援助スキル習得動機」の得点が「所属団体の存続期待」と「自己向上動機」よりも有意に高かった。一方、「自己向上動機」は他の継続動機因子よりも有意に低かった。これらの結果から、対面悩み相談群では、参加動機として人の相談に乗る姿勢や技術を学べることを高く評価し、継続動機としてもそのような動機を高く評価しているPSが多いことが明らかになった。各経験の活動意欲向上への有益度について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で($F(4, 172)=28.91, p<.01$)、多重比較の結果、「相談活動とPS同士のサポート」の得点が他の因子よりも高かった。また、「研修の受講や情報提供的援助」も「相談活動とPS同士のサポート」を除く他の因子よりも有意に高かった。これらの結果から、学生が活動意欲を高めると考えたものは、主たる活動である対面での悩み相談を受けることであった。また、所属団体内でのサポートや研修の受講などがPSの意欲を高めるうえで重要であることが明らかになった。(2) 広く学生支援を行う群 参加動機因子の尺度得点の平均値について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で($F(2, 134)=40.20, p<.01$)、多重比較の結果、「学び・出会いへの期待」、「援助スキル習得欲求」、「居場所としての期待」の順に得点が高かった。また、継続動機因子の得点の平均値について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で($F(4, 268)=15.92, p<.01$)、多重比較の結果、「学び・ふれあ

い動機」の得点が他の継続動機因子よりも高かった。また、「所属団体の存続期待」の得点も「学び・ふれあい動機」を除く他の継続動機因子よりも高かった。この結果から、広く学生支援を行う群では、参加動機として出会いへの期待や活動を通して広く学べることを高く評価し、継続動機としてもそういった学びや出会いへの期待を高く評価したPSが多いことが明らかになった。また、継続動機の「所属団体の存続期待」の得点の高さから、所属団体の存続を願う気持ちから継続している学生も多いことが明らかになった。各経験の活動意欲向上への有益度について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で ($F(4, 268)=51.68, p<.01$) で、多重比較の結果、「相談活動とPS同士のサポート」の得点が他の因子よりも高かった。また、「相談活動以外での企画・運営」の得点は「研修の受講や情報提供的援助」と「電話・メール相談」よりも高く、「新入生支援や学習支援」の得点も「電話・メール相談」より高かった。この結果から、この群の学生も、対面での悩み相談を受けることと所属団体内でのサポートがPSの意欲を高めると考えていることが明らかとなった。また、交流の場の提供などの相談活動以外での企画・運営や、新入生支援や学習支援も意欲を高めると評価されていた。(3) **1年間の新入生支援群** 参加動機因子の得点の平均値について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で ($F(2, 114)=107.75, p<.01$)、多重比較の結果、「学び・出会いへの期待」、「援助スキル習得欲求」、「居場所としての期待」の順に得点が高かった。また、継続動機因子の得点の平均値について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で ($F(4, 228)=46.95, p<.01$)、多重比較の結果、「学び・ふれあい動機」の得点が他の継続動機因子よりも高く、「所属団体の存続期待」の得点も「学び・ふれあい動機」を除く他の継続動機因子よりも高かった。一方、「援助スキル習得動機」は他の因子よりも有意に低かった。これらの結果から、1年間の新入生支援群では、参加動機として交友関係の広がりへの期待を高く評価し、継続動機として人との関わりにおける楽しさや視野の広がりを高く

評価しているPSが多いことが明らかになった。また、所属団体の存続を願う気持ちを高く評価している学生も多いことが明らかになった。各経験の活動意欲向上への有益度について1要因分散分析を行った結果、主効果が有意で ($F(4, 228)=19.93, p<.01$)、多重比較の結果、「相談活動とPS同士のサポート」の得点が「電話・メール相談」を除く他の因子よりも高かった。一方、「研修の受講や情報提供的援助」は、他の因子よりも有意に低かった。この結果から、この群も対面での悩み相談を受けることと所属団体内での交流やサポートがPSの意欲を高めると考えていた。また、同じ学部で2年生が1年生の支援を行うという性質上、電話やメールによる後輩からの個別相談も活動意欲を向上させる可能性があると考えられる。

Ⅲ. 運営側の苦勞と工夫 (研究2)

1. 目的

PSAを運営する教職員等が、PSの数や活動意欲の維持に関してどのような苦勞を経験し、どのような工夫を行っているかを明らかにし、改善策を提言する。

2. 方法

1) 調査対象

大学におけるPSAで運営経験のある教職員9名と学生代表者1名の計10名を調査対象(以下、協力者)とした(表4)。学生代表者であるJは、博士課程後期の学生であったが、設立準備段階から教員とともに運営に関与していたため、本研究の調査対象として妥当であると判断した。AからJのうちDとIは、2団体のPSAについて語ったが、Dの経験年数1年未満の団体については分析から除外した。Iについては、以前携わった団体に関する語りをI①、現在携わっている団体に関する語りをI②と表した。

2) 調査期間

2011年7月から2011年10月。

3) 調査手続き

まず、運営するPSAに関する基本情報について

て質問紙調査を行った後、半構造化面接調査を実施した。PSの募集や養成において経験した苦勞と、PSに活動を継続してもらう上での苦勞について語ってもらった。また、PSの募集や養成において行ってきた工夫とPSに活動を継続してもらうために行ってきた工夫について語ってもらった。面接内容は協力者の同意を得た上で録音し、面接終了後に逐語記録を作成した。

4) 分析法

木下¹⁵⁾の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いた。本研究では、大学PSAにおけるPSの数と活動意欲を維持するための運営側の苦勞、そのために行われた工夫やその背後にある意図を語りの中から読み解くことを目的としているため、人間の認識、行為、感情、それらに関する要因などを詳細に検討することができるM-GTAを採用するのが適当と考えられた。まず、データの関連箇所に着目し、それを1つの具体例とし、他の類似具体例も説明できると考えられる概念を生成した。生成した概念は整理をし、共通するものをカテゴリーとして

統合した。

3. 結果と考察

1) 苦勞のカテゴリー

「PSの数と活動意欲を維持するためにどのような苦勞を経験してきたのか」というリサーチクエストンについて、13の概念と4つのカテゴリーが生成された(表2)。**カテゴリーⅠ. PSの募集にともなう苦勞** ①活動希望者が期待ほど集まらなかった、②そのために募集のための工夫を行うも上手く機能しなかった、③PSとなる資格を有していても活動開始に至らなかった、という3つの概念で構成された。**カテゴリーⅡ. PSの継続にともなう苦勞** ①期待とのズレからPSの活動意欲を維持するのが難しくなった、②活動内外での負担から時間的・精神的余裕がなくなった、③活動の継続が困難になることに加え、PSに継続してもらうために設けた取組みや工夫が上手く機能しなかったなど7つの概念で構成された。**カテゴリーⅢ. PSの維持が上手くいかないことで生じる苦勞** ①PS全体の質の維持が難しかった、

表2. ピア・サポーター (PS) の維持にともなう苦勞のカテゴリー名、概念名

カテゴリー名	概念名	
Ⅰ.PSの募集にともなう苦勞	1.PSが集まりにくい 定義:PSになることを希望する学生が期待するほど集まらない。	
	2.募集の工夫が上手くいかない 定義:PSになる学生の募集のために設けた取組みや工夫が上手く機能していない。	
	3.活動希望者が活動開始前にやめてしまう 定義:研修を受講したり、資格を取得しても、活動開始にまで至らない学生がいる。	
Ⅱ.PSの継続にともなう苦勞	4.PSの意欲が維持されない 定義:PSの活動意欲を維持することが難しい。	
	5.活動を負担に感じて継続できなくなる 定義:PSが相談対応やその他の活動を通して大変さや負担を感じ、活動を続けられなくなる。	
	6.時間的・精神的な余裕がない 定義:PSが他の活動等で時間的・精神的な余裕がなくなり、活動を続けられなくなる。	
	7.他のPSとの関係で継続に支障がでる 定義:PS同士の関係のこじれ等から、活動の継続に支障がでる。	
	8.活動方針に関する難しさがある 定義:活動方針が定まっていない、あるいはマニュアル化されたために、PSの活動意欲を維持することが難しい。	
	9.継続的に参加するPSが少なくなる 定義:登録人数に対して実際に継続的に活動に参加しているPSが少ない。	
	10.継続のための工夫が上手く機能していない 定義:PSに継続してもらうために設けた取組みや工夫が上手く機能していない。	
	Ⅲ.PSの維持が上手くいかないことで生じる苦勞	11.PSの質の維持に苦勞する 定義:経験豊富なPSを確保できない等、PS全体の質の維持に苦勞している。
		12.活動が活性化しない 定義:新たな活動を展開できなかったり、一部のPSに負担が偏る。
		13.活動自体の維持にともなう苦勞 定義:活動場所や予算を確保し、大学側の理解や支援を得るなど、活動自体を存続させるために苦心している。

②活動が活性化しないという2つの概念で構成された。**カテゴリⅣ. 活動自体の維持にともなう苦勞** ①大学側の理解や支援が得られず、活動自体の存続に苦心しているという1つの概念が含まれた。

2) 工夫のカテゴリ

「PSの数や活動意欲を維持するためどのような工夫や取組みを行ってきたのか」というリサーチクエスションについて、17の概念と4つのカテゴリが生成された(表3)。**カテゴリⅠ. PSの募集のための工夫** ①積極的に広報を行った、②希望者が活動に参加できる機会を多く設定した、③希望者に対しては初期からの関わりを大切にしたいなど4つの概念で構成された。**カテゴリⅡ. PSの継続のための工夫** ①実際の活動の場を増やした、②研修会や交流会などを通して、PSが活動の意義ややりがいを実感できるように

した、③活動の企画運営をPSが主体的に行えるようにしたなど11の概念で構成された。**カテゴリⅢ. 活動自体の維持のための工夫** ①活動自体の存続のため、学内関係機関の理解や支援を得るための働きかけを行ったという概念が1つ含まれた。**カテゴリⅣ. 今後の活動の展望** ①さらなる学内関係機関との連携やインターネットを用いた他大学との交流など、PSの募集や継続のために今後行いたいという概念が1つ含まれた。

3) カテゴリ分析からみた協力者の語り

各協力者の語りが苦勞及び工夫の各カテゴリにどの程度該当するかを明らかにし、その理由を検討した(表4)。(1)苦勞のカテゴリ分析 「Ⅰ. PSの募集にともなう苦勞」の語りの数が平均よりも多かったのは、A、B、C、I②であった。A、B、Cの3名は活動年数が約11年であった。3名が多かったのは、他の大学よりも活動年数が長い

表3. ピア・サポーター (PS) の維持のための工夫のカテゴリ名、概念名

カテゴリ名	概念名
Ⅰ.PSの募集のための工夫	1.積極的に広報を行い学内での知名度をあげる 定義: 掲示物や広報物、授業での案内等を行い、学内での知名度をあげる。
	2.希望者が活動に参加できる契機を多く設ける 定義: 養成課程を正課の授業にしたり、随時募集する等、希望者が活動に参加できる機会を多く設定する。
	3.PSを個人的なつながりで集める 定義: PSや他の教職員にも学生の紹介を依頼し、個人的なつながりでPSを集める。
	4.初期から活動希望者への関わりを大切にする 定義: 希望者に活動の趣旨等を伝えたり、見習い期間を設ける等、初期からの関わりを大切にする。
Ⅱ.PSの継続のための工夫	5.活動意義を実感できるようにする 定義: 活動を通して、PSが活動の意義ややりがいを実感できるようにする。
	6.支援活動を通して広報を行い、PSの意欲も維持する 定義: 期間限定の出前相談、交流イベントの企画、紙面相談など活動の場を増やし、広報とともにPSの活動意欲を維持する。
	7.シフトを充実させる 定義: 活動のための準備作業等により、シフトの待機時間を充実させる。
	8.PSが主体的に活動を作っていくようにする 定義: 部局や委員会を設けたり、企画や研修会の運営をPSが主体的に行えるようにする。
	9.個人や団体のあり方について見直す機会を与える 定義: 研修会や他大学との交流などにより、個人や団体のあり方を見直す機会を提供し、PSの活動意欲を維持する。
	10.PS同士がよい関係を築けるようにする 定義: 内部の交流会を設けたり、PS同士がよい関係を築けるよう配慮する。
	11.役割を与えることで活動の運営を円滑にする 定義: 経験豊富な学生にアドバイザーなどの役割を与えることで、PS全体の活動意欲を維持し、活動の運営を円滑にする。
	12.活動の趣旨や内容を継承していく 定義: 活動のマニュアルを作成したり、上級生や卒業生と関わることを通して活動の趣旨を継承していく。
	13.PSとしての誇りや責任感を持たせる 定義: 大学公認であることを示したり、有償にすることでPSとしての誇りや責任感を持ってもらう。
	14.PSへの関わり方を工夫する 定義: PS個人や全体の動機や意欲等の現状を把握し、PSが継続できるよう適宜関わりを工夫する。
	15.継続的に参加できないPSへの対応を工夫する 定義: 色々な参加形態を認める等、継続的に参加できないPSへの対応を工夫する。
	Ⅲ.活動自体の維持のための工夫
Ⅳ.今後の活動の展望	

表4. 調査協力者の基本属性, PSの維持にともなう苦勞とPSの維持のための工夫のカテゴリーごとの語りの数

協力者	性別	大学	団体の活動年数	設立準備・運営に携わった年数	PSの維持にともなう苦勞				PSの維持のための工夫			
					I	II	III	IV	I	II	III	IV
A	男	K大		11年4ヶ月	11	12	6	2	11	19	2	0
B	男	K大	約11年	2年4ヶ月	11	13	7	1	10	15	2	0
C	男	K大		11年4ヶ月	11	11	4	1	13	22	2	1
D	男	L大	約7年	7年	6	7	6	1	10	10	0	0
E	男	M大	約5年	5年8ヶ月	5	5	3	3	4	11	3	4
F	女	N大	約2年	2年2ヶ月	0	6	3	3	7	14	4	1
G	男	N大		2年6ヶ月	1	4	1	3	9	19	4	1
H	女	O大	約7年	7年	6	5	4	4	8	20	4	0
I①	男	P大	約5年	5年	3	6	2	3	5	10	2	0
I②			約1年	2年	7	5	1	1	6	15	5	2
J	男	Q大	約2年	2年4ヶ月	2	11	5	3	6	23	4	3
平均 (標準偏差)					5.7 (3.84)	7.7 (3.16)	3.8 (1.95)	2.3 (1.05)	8.1 (2.64)	16.2 (4.49)	2.9 (1.38)	1.1 (1.31)

分, PSの募集に関してさまざまな苦勞を経験しているためと考えられる。一方, I②は, 活動が開始されたばかりであり, 今まさに学生を集める段階にあるため, 苦勞についての語りが多くなったと考えられる。「II. PSの継続にともなう苦勞」の語りの数が平均以上であったのは, A, B, C, Jであった。A, B, Cは活動年数が長いこと, 他大学よりもPSがあらゆる理由で継続できなくなっている状況を経験しており, より細かく語られているためと考えられる。Jが多いのは, 学生の代表者として運営側と学生の両方の視点から継続の苦勞を経験したためと考えられる。「III. PSの維持が上手いいかないことで生じる苦勞」の語りの数が平均よりも多かったのは, A, B, D, Jであった。A, B, Jは「II. PSの継続にともなう苦勞」と同じ理由が考えられる。Dの活動年数も約7年と長く, PSの維持が上手いいかないことによる二次的な苦勞を多く経験したためと考えられる。「IV. 活動自体の維持にともなう苦勞」の語りの数が平均以上であったのは, E, F, G, H, I①, Jであった。F, G, Jはいずれの活動年数も約2年で, いまだ活動自体の存続のために苦心しているためと考えられる。また, E, H, I①は, 活動年数は長いものの, いずれも中心的に運営を行う教職員数が1人もしくは2人と少なく, 教職員にかかる運営の負担が大きいためと考えられる。(2) 工夫のカテゴリー分析 「I. PSの募集のための工夫」の語りの数が平均よりも多かつ

たのは, A, B, C, Dであった。いずれも団体の活動年数は7年以上であり, 養成課程の一部を正課の授業として開講するなど, 団体としての募集に関する取組みが蓄積されているためと考えられる。「II. PSの継続のための工夫」の語りの数が平均以上であったのは, A, C, G, H, Jであった。A, C, Hは運営に携わった年数が長く, PSを継続させるための取組みが蓄積されているためと考えられる。JはPSの視点からも取組みを考案・実施しているためと考えられる。「III. 活動自体の維持のための工夫」の語りの数が平均よりも多かったのは, F, G, H, I②, Jであった。F, G, I②, Jは各団体の活動年数が2年前後で, 活動を作っていく段階にあるためと考えられる。Hは活動年数が長く学内での理解や協力を得て活動場所や予算を確保することに尽力していたためと考えられる。「IV. 今後の活動の展望」の語りの数が平均以上であったのは, E, I②, Jであった。I②, Jは, いずれも活動年数が短く, 構想段階にある活動や取組みが多いためと考えられる。Eは複数の大学での交流会を主催するなど, PSAの発展に向けて常に新しい取組みを展開しているためと考えられる。

4) 苦勞と工夫との関連

苦勞と工夫の各カテゴリーごとの協力者の語りの数から, 協力者の類型化を試みた。苦勞のカテゴリーのうち, 「I. PSの募集にともなう苦勞」, 「II. PSの継続にともなう苦勞」, 「III. PSの維

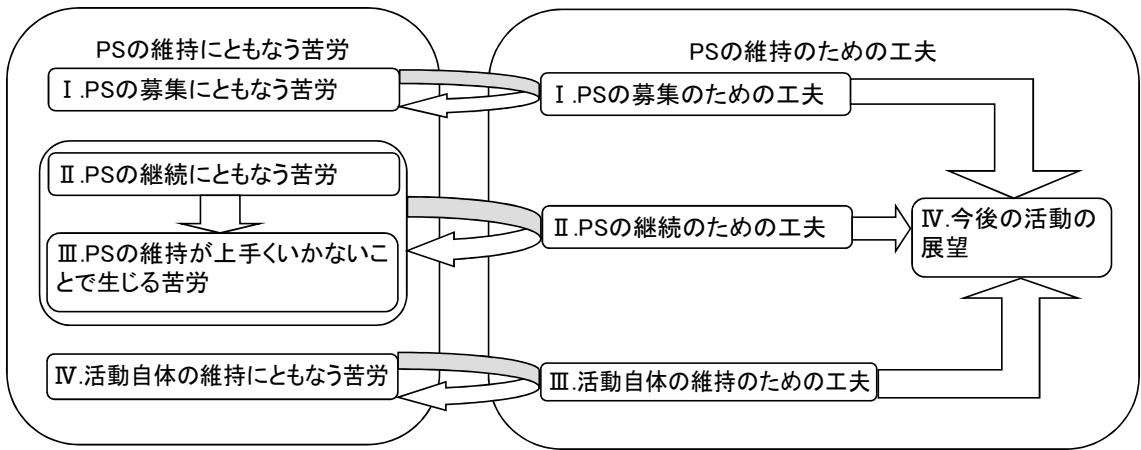


図1. PSの維持にともなう苦勞とPSの維持のための工夫の関連

持が上手くいかないことで生じる苦勞」の語りが多い「募集と継続の苦勞群」と、「IV. 活動自体の維持にともなう苦勞」の語りが多い「活動自体の苦勞群」に分類した。「募集と継続の苦勞群」には、活動年数が最長のA, B, Cが該当した。また、「活動自体の苦勞群」には、E, F, G, H, I①が該当した。次に、工夫のカテゴリーのうち、「I. PSの募集のための工夫」の語りが多い「募集の工夫群」と、「III. 活動自体の維持のための工夫」の語りが多い「活動自体の工夫群」に分類した。「募集の工夫群」には、A, B, C, Dが該当した。「活動自体の工夫群」には、E, F, G, H, I②が該当した。

苦勞と工夫の類型の関連について、「募集と継続の苦勞群」のうち、A, B, Cは「募集の工夫群」にも該当した。Dは、「募集と継続の苦勞群」には該当しなかったものの、「I. PSの募集のための工夫」と「III. PSの維持が上手くいかないことで生じる苦勞」の語りは平均よりも多かった。また、「活動自体の苦勞群」と「活動自体の工夫群」は該当する協力者が一致した。Iについては、以前の団体で認識した課題を現在の団体で生かして取り組んでいると思われる。以上のことから、各協力者は、より困難や苦勞を感じている部分において、より多くの工夫や取組みを行っていることが明らかになった。そこで、苦勞と工夫のカテゴリ

ーが明確な対応関係を示す仮説モデルを図1に示した。

IV. 結 語

1. 本研究の成果

研究1より、いずれの群のPSも、活動を通して人と出会い、学ぶことへの期待は参加当初も活動継続中も高いことが明らかになった。また、所属団体の居心地のよさや所属団体の存続を願う気持ちも活動継続につながる事が明らかになった。さらに、PS同士がサポートし合える環境にあること、各群の主たる活動が充実することが、PSの活動意欲を高めることが明らかになった。

研究2より、PSの数や活動意欲を維持するための苦勞と工夫に関連があることが明らかになった。また、PSの数や活動意欲を維持するためには、活動自体の存続のための取組みも重要であることが明らかになった。

2. 今後の課題

本研究では、調査手続き上、PSと運営側を団体ごとに比較検討することが困難であったため、PSの参加及び継続動機と運営側の苦勞や工夫との関連を明らかにすることはできなかった。今後は運営側の取組みをPSがどのように体験し、活動意欲を高めているのかについての関連を検討す

ることで、大学におけるPSAが抱える課題への有効な方策が見えてくるのではないかと考えられる。また、同じPSAの形態であっても、運営側の苦労や工夫は対象者によって大きく異なり、そこには活動形態よりも、大学側の支援体制や財政的状况などの別要因が影響を及ぼしている可能性が示唆された。しかし、本研究では、各団体への大学側からの支援状況や、学内での位置づけについて明らかにできなかった。今後は各団体が置かれている状況に応じて展開できる活動や取組みを検討することが必要であると思われる。

【謝 辞】

調査面接の実施に当たり調査をコーディネートして下さった広島大学保健管理センター准教授内野悌司先生及び調査対象者の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Cole, T.: Kids helping kids: A peer helping and peer mediation training manual for elementary and middle school teachers and counselors (2nd. Ed.), Peer Resources, Victoria, Canada, 1999.
(バーンズ亀山静子・矢部 文 (訳):ピア・サポート実践マニュアル, 川島書店, 東京, 2002).
- 2) 森川澄男:ピアサポートの広がり, 現代のエスプリ, 407:177-185, 2001.
- 3) 日本学生支援機構:「大学, 短期大学, 高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査について」調査報告, 2011.
- 4) 早坂浩志:学生に向けた活動2ー授業以外の取組みー, 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会(編), 学生相談ハンドブック, 東京, pp185-201, 2010.
- 5) 中出佳操, 今野礼子, 青池美紀, 他:学生相談の現状とピア・サポート活動の活用に関する研究, 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要, 42:227-234, 2004.
- 6) 内野悌司:新入生を先輩が支援する広島大学ピア・サポート活動について, 大学と学生, 29:17-24, 2006.
- 7) 大石由起子:高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待, 大学と学生, 561:16-21, 2010.
- 8) 村山大佑:学校現場で活動するピアカウンセラーの主観的成長感に関する事例研究, 平成13年度卒業論文, 2001(未公刊).
- 9) 名古屋大学学生相談総合センター:2010年度名古屋大学ピア・サポート & 就活サポーター活動報告書, 2011.
- 10) 大石由起子・林 典子・稲永 努:大学における新入生支援としてのピアサポート活動ー立ち上げの2年間をめぐる考察, 山口県立大学学術情報, 3:29-44, 2010.
- 11) 鈴木英一郎:大学ピア・サポート活動の新しい可能性, 日本学生相談学会第29回大会発表論文集, 68, 2011.
- 12) 蒲池和明・兒玉憲一:中高年ボランティアの参加動機, 継続動機, 成果認識の関連, コミュニティ心理学研究, 14(1):52-67, 2010.
- 13) 妹尾香織・高木 修:援助行動経験が援助者自身に与える効果ー地域で活動するボランティアに見られる援助成果認識, 社会心理学研究, 18:106-118, 2003.
- 14) 猪八重涼子:大学におけるピア・サポート活動がピア・サポーターに及ぼす影響, 平成22年度修士論文, 2011(未公刊).
- 15) 木下康仁:グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践ー質的研究への誘い, 弘文堂, 東京, 2003.
- 16) Strauss, B. G. & Glaser, A. L. Awareness of Dying, Aldine Publishing Company, 1967.